

第1章 思い通りには振る舞えないワケ

——「間違った知識」を修正しよう——

1 演技力がなければ「人間」になれない

まず基本的なことですが、「人間」というものの本質を考えることにしましょう。私たちの日常会話の中では「人間」と「ヒト」という言葉が、時に同じ意味のものとして登場します。もし意味が同じなのであれば、あえて「人間」「ヒト」などというように別々の単語を用いる必要性はないはずです。

しかし実際に二つの単語が存在する以上、何か特別な意味があるわけです。「人間」と「ヒト」は違うのだということを知れば、「どうして自分はいつまでも一人前に扱ってもらえないのだろうか？」というストレス・スパイラルから少しは逃れられるでしょう。

ところで、私はいくつかの社会学の学会に所属していますが、学会という組織には「大会」と呼ばれるイベントがあり、毎年必ず開催されることになっています。このイベントには、

いわゆる「研究発表会」と「理事会」「総会」「懇親会」などが存在し、私もよく、いずれかの学会の「大会」に参加し、研究発表をしています。

ある時、私は「人間」という存在の条件を規定した学者の学説研究をして「大会」で報告したのですが、私はその発表の中で「この地球上には『人間』はひとりもない。『人間的存在』はたくさんいるのだ」ということを述べました。すると、（これは予想通りだったのですが）私の発表に対して質問が出され、その理由を詳しく説明するように求められました。

私は、社会人類学者のラドクリフブラウン（一八八一―一九五五、イギリス）という学者の学説研究を手懸けているのですが、世界中を探しても、社会学者でそのような研究をしている者はおそらく私ただひとりだけでしょう。ですから、私の報告を聞いている他の社会学者も、その点では私にいろいろな確認を求めるのは当然です。

さて、私が依拠したラドクリフブラウンの理論についてですが、彼が四〇年に亘る学者生活の中で得た結論は、次のようなものでした。これは、彼が一九四〇年に演説した『社会構造について』という有名な文章の中からの引用です。

Every human being living in society is two things: he is an individual and also a

person.

私は長い年月をかけて、この英文をこう訳してみました。

社会に生活しているすべての人間（的存在）は、二つのことにより存在する。すなわち、彼は一個体（一生命体）であり、また役割演技者である。

ラドクリフブラウンの言葉を借りると、「人間という存在はただ生きているだけではダメだ！」と言うことになります。命を守りつつも、「役割演技」をしなければならないのです。

では、「役割演技」というのは、いったい何なのでしょう？ それは“person”の語源を調べればヒントがあらわれます。この言葉は、もともと“persona”（ペルソナ）——すなわち「仮面」という意味を表していました。仮面舞踏会でかぶる「仮面」です。もし自分が男でも、かぶっているのが女性の仮面であれば、舞踏会では女性らしく振る舞わなければなりません。ホップズ（一五八八―一六七九、イギリス）が“person”とは、役者のようなものである」と言ったように、あなたがもし人間として認められたければ、社会という舞台の上で「役者」

として演技をし、そのドラマに参加しなければならないのです。

しかし、役者さんは常に同じ演技をしているのではなく、様々なドラマや映画に出演し、それぞれ異なるシナリオにしたがって役作りをしているのです。例えば、ある役者さんは、先月まで出演していたテレビドラマでは刑事を演じていたけれど、今ちょうど撮影中の映画では強盗役だ——ということがあっても、何ら不思議ではありませんよね。人間という「役者」も、これと同じように振る舞わなければなりません。

しかし、その演じ分けをするにはどうしたらよいのか？ それを解き明かすに便利なのが「地位と役割」という概念です。

「地位（ステイタス）」と言うと、多くの人が「エライ人のこと」をイメージするようです。それは、「社会的地位」とか「ステイタス・シンボル」などというように用いられる機会が多いからかも知れません。しかし、「地位」というのは「エライ人」にしかないものではありません。名前、性別、年齢、出身地、居住地、職業、人種、民族などはすべて「地位」ですし、自転車をこいでいる人、歩行者、乗客、観光客などというものも「地位」に含まれます。ですから、「○山×夫、三五歳、独身、高校の教員、趣味は音楽鑑賞、△△大学出身」という自己紹介の内容は、すべて「地位」で構成されていることとなります。

このように「地位」とは「名称で表される個人情報」のことで、個々人の責任の所在を明確にするのに威力を発揮します。野球の場合、ポジション名によって「どこを守るのか」「何をするのか」が明確に伝えられます。ですから、「私は、マスクやプロテクターをつけて、ピッチャーの投げた球をしゃがんで受け止めたりします」と言うよりも、「私はキャッチャーです」と言ったほうが簡単で、且つ確実に自分のことを相手に理解してもらえるわけです。企業内でも、「○○部」とか「××課」という配属先によって、仕事の内容や責任の範囲が表現されます。学校の先生も、どの教科を教えているのかによって、責任の範囲が確定されるわけです。

こうしておけば、「何が原因で（野球の）試合に負けたのか？」とか「どうして利益が上がらなかったのか？」というような責任追及にも使えますし、逆に

「先生、社会科の先生ですよ。法改正の手続きについて教えてください」

「私は世界史担当だから、政治経済の先生に聞きなさい」

というように、責任回避にも使えます。

一方「役割」というのは、自分や相手の「地位」に対する意識を具体的に表現する「態度」

のことです。ただし、その表現については、気を付けなければならぬことがあります。それは「今、ここで何を表現するべきなのか？」ということことです。表現内容が正しくなければ、せっかくの努力も水の泡です。ですから、「今、自分は何を期待されているのか?」「今、この人に何を期待しても良いのか?」ということのことをキチンと理解していないといけないわけです。授業中の教室で歌を歌ってもよいのは、音楽の先生だけでしょ。営業課の社員が設計・組立に回ることもないでしょう。あるいは、足を骨折して耳鼻科に駆け込む人もいないでしょう。つまり、「役割」というものは、周りの期待を知ることによって成り立つものなのです。ところで、「地位」と「役割」を別々に理解しようとする人もいるのですが、それは間違いです。「地位」と「役割」は常にペアの状態であらわれます。また、「地位」というものは、自分で名乗ることはできません。「役割」を果たしている姿が誰かに認められて、初めて「地位」が与えられるのです。いくら教員免許を持っていても、教師という職業に就いていなければ「先生」と呼ばれることはないでしょう。

国民的漫画家であった手塚治虫は「医学博士」の学位を持ち、医師免許も取得していましたが、医師としての仕事は一切せず漫画家の仕事に専念していたので、漫画家として「先生」とは呼ばれても、医師として「先生」と呼ばれたことはなかったわけです。

さて、冒頭の「役割演技」に戻りましょう。今まで述べてきたように、私たち人間はただ生きているだけでは誰からも何の期待もされません。期待を受け、それにキチンと応え（「役割」を果たし）、「地位」を与えられ、初めて「人間」として認められるのです。役者さんも「役者」として継続的に仕事を得るためには、渡されたシナリオと演出家の指導通りに演技できることが条件です。いろいろなタイプの演技ができれば、いろいろなドラマや映画、舞台の仕事が舞い込んでくるはずですよ。逆に、セリフはよく忘れ、演技もぎこちない、ただノリの良さだけで仕事をしているような役者さんは、同じようなタイプの仕事しか依頼されないでしょう。

自分が何を期待されているのかを知り、その役に成りきることで、その場その場に合った演技ができるようになるわけです。また、自分が何を期待されているのかを知っていても、演技力不足のために「役割」を演じきれなかったりすると、立派な「地位」が与えられないばかりか、「人間」としての評価も下がってしまうのです。

あなたも、好きな人に気に入られたい一心で相手の理想の「恋人像」を演じた経験があるのでは? それと同じことなのです。いくら心で「好きだ!」と思っても、相手に気に入ってもらえるような「恋人像」を演じなければ、相手はあなたの目の前を通り過ぎてしま

いますよ。

ただし、常に周りの期待に応えるという作業は困難極まるものです。体調が悪かったり、気が付かなかったり、一度にいくつものことを期待され、すべてに応えきれないこともあります。野球選手はファンから「ヒットを打ってほしい」「バッターを打ちとってほしい」という期待をかけられますが、いつでもヒットを打てるわけではありませんし、バッターを打ちとれるわけでもありません。常にファンの期待に応えるということは簡単なことではありません。とすると、完ぺきに「人間」という存在を演じることは不可能に近くなります。そこで私は、「人間」に近付こうという努力をしている存在を「人間的存在」と表現し、救済することにしました。本当は、私自身が自己弁護をするための都合の良い解釈なのかも知れませんが……。

2 「指切りげんまん」って何?

「人間」として認めてもらいたければ、常に周りからの期待に応えなければならない。それがわかって安心した途端、「役割演技」とらわれすぎて気の休まる暇がなくなり、自分の好きなようには振る舞えないのではないかと、という次のストレス・スパイラル。ただし、その「地位」に興味・執着がなければ「役割」を果さなければいいのですから、このことに関して「自分の好きなようには振る舞えない」と言うのはちょっと筋違いなことかも知れません。

価値ある「人間」として認められるのは、決しておやすいことではありません。でも、それがもとでストレス・スパイラルから抜け出せなくなる人もいるはずですよ。

とは言え、どんな「地位」の人であれ「自分の好きなようには振る舞えない」という現象に遭遇している事実は否定できません。世の中には、法律・ルール・命令など、いわゆる「規範」が存在していますが、これらを破ることはもちろん御法度です。だから、いくら規範にしたがいたくなくても、守ることが義務になっているわけです。

しかし、どうして規範というものが存在し続けているのでしょうか？ それを極めるために、中国の春秋戦国時代にまで話をさかのぼって参りましょう。その時代の中国に、孔子（紀元前五五〇～四七九ごろ）という学者がいました。彼の思想体系は儒学と名付けられ、彼の死後、弟子たちによって編まれた「論語」によって、彼の思想はよく知られるところとなりました。後に、その「論語」を読んで感動した二人の学者が現れます。まず孟子（紀元前三七二～二八